

令和5年2月9日

講 評

新福岡県立美術館整備事業基本設計プロポーザル選定委員会
委員長 宮城 俊作

新しい福岡県立美術館は、1929年に開園した大濠公園の地において、100年目の年にあたる2029年度の完成を予定しています。その設計者を選定する公募型プロポーザルを実施したところ、一次審査に39者、二次審査に4者の参加をいただきました。まずは、参加をいただいた全ての方々の努力に深く敬意を表します。

二次審査では、一次審査で提示いただいた提案を、二次審査の主題を踏まえ更に発展させた詳細な提案が示されました。どの提案も時間をかけ熟度高く練られたそれぞれに魅力のある提案であったことから、選定委員会においても最優秀者の選定に非常に苦慮いたしました。

最優秀の提案は、次の三点について、特に高く評価されました。

1. 本プロポーザルの主題の一つである「公園と一体となった美術館」を踏まえ、国体道路側から大濠公園側にかけて大変透過性の高い空間構成となっており、美術館を介した公園と都市の繋がりが表現されていること。また、街と公園をつなぐ南北方向の「アーバンスリット」と、県民のアート活動をつなぐ東西方向の「メディアヴォイド」というヴォイドの空間を直交させることによって、「アーバンスリット」により都市へのステートメントを明快に主張し、「メディアヴォイド」によりアートと人のコミュニケーションのあり方に一つの強いメッセージを込めた提案となっている点。
2. 展示・収蔵の空間では、多様なコレクションに対応する常設展示室、3段階の高さの展示室がシンプルに繋がった明快な動線による企画展示室、将来の拡張性まで配慮された収蔵庫など、古美術から近代、現代美術まで所蔵する福岡県立美術館に相応しい環境が提案されている点。
3. 日本庭園との関係では、建物の高さを日本庭園に向かって階段状に低く抑え、徐々にスケールダウンすることで、庭園に調和した空間のボリュームに収めていること。また、庭園から見た建物の佇まいは、深い軒庇の建築と庭園が一体となった日本の伝統的な空間構成の規範である「庭屋一如」*を現代的にしっかりと意識したものとなっている点。

最優秀者には美術館の学芸員をはじめとする福岡県の関係者はもとより、広く県民の皆様との密接なコミュニケーションを図っていただき、大濠公園の次の100年のスタートに相応しい、世界から多くの人々が訪れる新しい福岡県立美術館が完成することを期待いたします。

*「庭屋一如」は、我が国の伝統的な空間に見られる建築と庭が一体化した構成を、日本の環境文化を代表する概念の一つとして、本プロポーザル対象敷地内にある茶室及び茶会館を手がけた故・中村昌生氏が強調されていたものです。